

---

# あの時の声

夕陽

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

あの時の声

### 【コード】

N6806Y

### 【作者名】

夕陽

### 【あらすじ】

すべての始まりはあの時の声が聞こえたことだった。

あたしはいつものように学校に行って、いつものように授業を受けると思っていたんだ。  
ただど死んだ。あまりにもあっけなく。  
死んでしまったんだ。

そこからのあたしの運命はがらりと変わった。

《注意》更新遅めになるかも知れません。

## 第一話 声（前書き）

はじめましてもはじめましてではない方もこんにちは。  
夕陽です。

## 第一話 声

真っ白な世界

此処は……どこ……？

あたしはそこで目を覚ました。

えっと……。あたし確か此処に来る前…。

\*\*\*

「杏奈<sup>あんな</sup>

！！早く学校に行きなさい！！」

台所のほうからお母さんの声が聞こえる。

「分かってる！！つか、今から行くところなんだけど！！！！」

あたしは叫んだ。

「分かってるなら早く行きなさい！！もう、8時10分よ！！」

「十分間に合う！！」

あたしはいらいらしながら靴を履いた。

あーも ……！！ここから学校なんて5分で着くってなんで分からないかな？

ドアノブに触れまわしながら思った。

「行ってきまーす!」

言ったとたんにドアを閉めた。

「行ってらっしやーい。」

中からくぐもった声が聞こえた。

あたしは学校に向かって駆け出した。

\*\*\*

「はー。なんで学校なんてあんだろ。」

あたしはつぶやいた。

「そんなこと言わない。」

後ろから声が聞こえた。

あたしは驚いて背筋を伸ばした。

「誰?」

あたしは言いながら構えた。

「はいはい。構えない構えない。杏奈が空手得意のしてるんだから。」

」  
手をたたきながら路地から出てきてあたしに声をかけた人は言った。

「何だ。優美ゆうみか。もー！脅おそかさないでよ！！」

「ごめんね〜。」

「ところで、優美。今日寝坊した？」

あたしは優美の頭に目を向けた。

「なんで分かんのか？」

優美は驚きながらあたしに聞いてきた。

「だって、今日優美がここ来んのいつもより10分ぐらい遅かったじゃん。それに。」

「それに？」

「ここ。」

あたしは優美の頭を指で指した。

「頭が。どうかしてる？」

「はねてるよ！」

ふふっ。

あたしは笑いをこらえて言った。

「えー！うそー！どごとごと。」

優美は自分の頭をぺたぺた触ってる。

きれいにはねてるところを避けて。

「だ・か・ら。ごご。」

もう一度は寝てるところを指差した。

頭の右斜め後ろを。

「へっ。あっほんとだ。…どーしよー！…！」

「早くしなよ！先に学校に行っちゃうよ。」

あたしはアワアワしている優美に向かい叫んだ。

「あー！ちょっと待ってよ　　…！」

優美が走ってきた。

「よつと。杏奈に追いついた。」

「あんだ、足速すぎ！」

「私の足をなめるんじゃないわよ！100メートル12秒フラット

の陸上部のエースよエース。」

「傲慢？」

「かもね!！」

あたしはいつものように学校に行くと思ってた。

その時間こえた変な言葉を聞くまで。

『ゴオーザザ。は\*く。に\*\*。あん\*。に\*て。』

不思議な声が聞こえたんだ。

あたしが後ろを振り返っても誰もいない。

「ん。どうしたの杏奈？」

「……何でもない。」

あたしは後ろを見つめたまま答えた。

どうやらあの声はあたし以外には聞こえないよう  
だ。

ゴー

あたしは後ろを見つめたまま思った。

何?この音。

「またもや優美には聞こえないと思っていたが今度は優美にも聞こえていた。」

「杏奈。何かな？この音。」

明らかに不安がにじみ出ている声だった。

そして、あの声がまた聞こえた。

『にげ\*。このま\*あな\*た\*が\*\*\*いたら。\*\*\*しま\*づ。』

何？

そして、あたしの頭なかには映像が流れ込んできた。

大きなトラックが突っ込んできて運転手が眠ってて。

そしてあたしたちが

トラックに……………引かれた様子を

「!?!」

あたしは、目を見開いた。

この映像はなに？あの声は何？

どこかで聞いたことある声だった。

ゴ―

またあの音が聞こえた。

優美は普通に前を歩いている。

どうやらあの音は何にも関係ないなどと結論付、気にしていない様子だった。

ゴ―

どンドン音が近づいてくる。

ゴ―

そしてあたしの後ろで音がした。

あたしは振り返って運転手を見たんだ。

眠ってた。

あの映像と全く同じ運転手で、あの映像と全く同じトラックだった。

あたしは思った。

逃げなくちゃ。

そして、優美に叫んだ。

周りには人っ子一人いなかった。

「優美！！逃げて！！」

「はっ？意味わかん…な…い。」

優美は振り返って言った。

最後のほうの声は消えかかっていた。

優美は固まってしまった。

ああ。トラックはもうすぐそこまで来ているというのに。

「早く！！」

あたしは優美を突き飛ばした。

ドン

鈍い音がした。

そしてあたしの体は宙を舞った。

全てが一瞬の出来事だった。

あたしが優美を突き飛ばして、あたしが

トラックに

引かれるまで。

\*\*\*

そこからは、あたしの記憶は残っていない。

ただ、あたしが死ぬ一瞬前に優美に声をかけて優美が泣き崩れていた気がする。

そしてあたしは感じたんだ。いや、？実感した。？という方があっている。

そうか、あたしは

『死んだ』

のか。

## 第一話 声（後書き）

どうでしたか？

もうあれですよ。

主人公死んじやいましたよ。

これからどうなっていくか楽しみに待っててください。

感想等頂けると嬉しいです。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n6806y/>

---

あの時の声

2011年11月20日18時49分発行